

「避難所の環境から考える未来の防災」

千葉県立東葛飾中学校 3年 ^{なかもと} ^{まい} 中本 真依

近年、土砂災害に関するニュースを耳にすることが、以前と比べると多くなったように感じる。これは、地球温暖化による記録的豪雨や大型台風、長梅雨などの異常気象が次々とみられる上に、日本は傾斜の急な山が多いため、土砂災害が起こりやすい環境になっているのだと考えられる。平成30年の土砂災害は3,459件も発生しており、昭和57年以降観測史上最高を記録している。自然災害を防ぐことはできないので、被害を最小限に抑えるにはどうしたら良いのだろうか。

土砂災害の前兆を知ることができれば、事前に避難の準備をしたり、災害がいつ起こるのかを意識したりし、土砂災害から身を守ることができる。平成31年から5段階の警戒レベルの運用が開始されたことで避難を開始する基準が明確化された。土砂災害の予兆に関する知識がない人も警告がくることにより、土砂災害から身を守るために、避難への意識が高まるようになった。以前よりも早く避難ができるようになったのにもかかわらず、いまだ逃げ遅れる人が多いのはなぜだろうか。

原因として考えられるのは、「自分は大丈夫だろう」「まだここにいても大丈夫」「ここは安全」と、日常生活の延長上の出来事だと判断し、危険を過小評価してしまう人の心理にあるのではないか。これは「正常性バイアス」と呼ばれ、偏見、先入観といった意味で、つまり、多少の異常事態が起きて、それを正常の範囲内として捉え、心の平穏を保とうとする働きである。

平成30年7月に起きた土砂災害のひとつ西日本豪雨に着目してみる。

西日本豪雨では、気象庁が事前に記者会見するなどし、警戒を繰り返し呼びかけていたが、数十年に一度の大雨が予想される「大雨特別警報」の発令後も、ただちに避難しなかった人が多かった。浸水で多くの犠牲者を出した岡山県倉敷市真備町では、死者の約8割にあたる約40人が屋内で発見されていることから、逃げ遅れて溺死した人が多かったと考えられる。

被害を最小限にするためにはどのようにしたら良かったのだろうか。逃げ遅れた人の理由を聞いてみると、「実際に災害が発生してから、ようやく自分の危険に気がついた」「今までも大丈夫だったから、今回も自分は大丈夫」と、先ほどの正常性バイアスによるものが多かったが、他にも「周りの人が避難しないから大丈夫」という集団心理によるものや、「避難所で滞在するのが不便そうで、避難が億劫」「避難所がベットを受け入れてくれないから、家にとどまった」という避難所の環境によるものなど、正常性バイアスと同様に多くの声があった。

これらの証言から、逃げ遅れの原因は正常性バイアスだけではなく、避難所への行きづらさもあると私は考えた。土砂災害は前兆現象に注意し、一刻も早く避難する意識が大切だ。そのためには、正常性バイアスに加え、「避難所には行きたくない」という考えを変えなくてはならない。そのためには避難所の環境づくりが最も重要だ。なぜなら、多くの人が抱く日本の避難所のイメージは、不衛生、冷暖房設備が悪い、プライバシーがない、水食料品不足など、居心地の悪いといった負のイメージが多く持たれているからだ。日本の避難所は85年前と同じ光景のところもあるくらいだ。このようなところに行くなら、一見安心に感じる自宅にとどまりたいと大抵の人は思うだろう。

そこで私は、日本と同じく災害が起こりやすいイタリアの避難所を調べてみた。イタリアでは法律で、避難所には48時間以内にテントやベッド、仮設トイレや食堂などを準備し、提供することが定められている。仮設トイレはとても綺麗で衛生面にも気遣われている。備蓄に関しては、イタリア全域に7ヶ所以上の大規模な倉庫がある。ボランティア団体にも備蓄倉庫があり、災害支援物資を運搬、配布する職能支援者が300万人近くいることがわかった。職能支援者には国から交通費が支払われ、日当も支払われる場合がある。イタリア在住で避難所に行く人の割合が、日本と比べ多い理由がわかる。

日本にも、災害時に支援を行おうとする警察や消防などの公務員、その他ボランティア団体もいるが、それだけでは圧倒的に災害支援者が不足している。

令和2年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

災害時、躊躇なく避難所へ行く意識が高まれば、被災者は少しでも減るのではないか。一刻も早く、イタリアのような安心して過ごせる避難所をつくる必要がある。そのためには、国が中心となった災害対策専門省庁と職能支援者制度の構築が必要だと思う。これが、私の考える未来の防災だ。